

兵庫県立歴史博物館紀要



第 34 号

姫路藩士・下田桂屋と文人画家・浦上春琴 —『桂屋遺稿』にみる文雅の交わり—	山口奈々絵 1
【資料紹介】明治期の広告契約に関する文書	吉原 大志 11
【資料紹介】「城郭巡視日記」(二)	竹内 信 19
【報告】改修工事期間中における博物館資料の保存環境について	山口奈々絵 吉原 大志 30(39)
【活動報告】2021 年度れきはく連続講座 「野里界限まち歩き講座」の実施について	鈴木 敬二 38(31)
【活動報告】博物館における展示情報の提供と博学連携 —“ひょうご五国”歴史文化キャラバン 赤穂会場の取り組みを事例に—	竹内 信 前田 和彦 48(21)
【展覧会記録】巡回展「“ひょうご五国”歴史文化キャラバン」について	香川 雅信 50(19)
大坂仏師「宮内法橋」と 神出仏師「厚木民部・保省」の作例、修理例表の修正	神戸 佳文 68(1)

2023(令和5)年3月

兵庫県立歴史博物館

【活動報告】

博物館における展示情報の提供と博学連携 —“ひょうご五国” 歴史文化キャラバン赤穂会場の取り組みを事例に—

竹 内 信・前 田 和 彦

はじめに

“ひょうご五国” 歴史文化キャラバンは兵庫県立歴史博物館（以下、当館と表記する）の施設設備改修工事期間中（令和3年9月～令和5年3月）に、県内各地の博物館・資料館を巡回して行われた展覧会である。その概要は他稿に譲るが^{（註1）}、当館としては比較的規模の小さいものとして位置づけられる。会場は尼崎市立歴史博物館を皮切りとして、摂津・播磨・丹波・但馬・淡路の“五国”を巡回したが、播磨地域については三木市立みき歴史資料館（開催期間：令和4年2月～3月）と赤穂市立歴史博物館（9月～10月、以下赤穂展と表記）の2会場で行われた。

筆者（竹内）はこれらの展示会場のうちの赤穂展を担当した。展示資料は巡回先の会場規模に応じて様々であったが、各館を共通して展示される資料（共通資料）と、開催地域ゆかりの資料を会場限定で出品する展示構成をとっており、赤穂展も一部資料の出品見合わせはあったものの、おおむねその体裁に従っている（【表1】）。加えて、講演会の開催といった付随事業も各会場担当者の裁量に任されていたことから、会場によってはトークショーの開催（豊岡会場）が企画される等、各地で特色のある内容となった。

ところで、巡回展が開催されるきっかけとなった当館の改修工事では、様々な事由によって展示の大規模なリニューアルを行うことができなかった。その代替策として、常設展示の「展示替え」を行うことを当座の措置としている。この「展示替え」は、特別展で使用してきた空間の一角を常設展示（通史）とすることをはじめとして、比較的大規模な展示替えが予定されている。

こうした展示替えを控えていたこと、筆者（竹内）自身の経験の浅さに対する焦りもあって、当館における資料情報の提供手法を今後どのように

していくかを、展覧会の企画・運営を通して考える必要性を感じていた。そこで、今回の赤穂展を担当するにあたって展示資料に関する情報の提供方法をいくつか試験的に実施することとした。具体的な実践内容としては、①音声ガイドの導入、②QRコードを用いた補助解説の導入、③ワークシートの作成の3点である。いずれも多くの博物館での導入がみられるが^{（註2）}、当館における事例蓄積はほとんどない状況にある。本稿はこれらの取り組みの内容と、そこから得られた成果や課題について報告することで、これらの導入を検討する上での参考に供したい。なお、③ワークシートの作成に関する取り組みについては、前田和彦が中心となって推進したため、第3章～第4章を前田が、それ以外を竹内が分担して執筆している。

1 音声ガイドの作成について

（1）概要

本展を企画するにあたって、音声ガイドの導入を企画したが、その理由は2つある。

ひとつは観覧者が展示されている資料をじっくり鑑賞できる環境を整えたいと考えたことによる。解説パネルは多ければ多いほど豊富な情報を提供することができる一方で、その量が多すぎれば展示資料と解説の主副が逆転してしまうことがよくある。かといって解説パネルを少なくしすぎると、特に古文書をはじめとした歴史資料の展示は見向きもされず、敬遠されてしまう。こうした認識から、展示を企画するにあたっては、解説パネルを必要最低限の内容とし、パネルの量を極力少なくするように心がけ、補助的な内容については音声ガイドの導入と、次章で述べるQRコードを利用した補助解説シートの設置で補うこととした。

音声ガイド導入理由の2つめは、展覧会における高校生との関係性を築くことである。高校生は

当館と接する機会の少ない年齢層として館内では認識されており、いかにして高校生と館との関わりを持つかが課題とされていた。この点に関しては神奈川県立歴史博物館が高校生にガイド音声の吹き込みを依頼していた事例を目にしていたため^(註3)、これを参考にしながら、音声の吹き込みを通じて館と高校生を結びつけ、地域の歴史に触れる機会を創成することを目標として、取り組みを試行することにした。

ガイド音声の吹き込みの依頼先は、地元の県立赤穂高等学校（以下、赤穂高校と表記）としたが、これは当該校が開催会場である赤穂市に立地する唯一の公立高校であったことが大きい。偶然にも当館職員の大西正則氏が同校の元校長職にあったことも幸いして、同校との初期のやりとりは円滑であったが、博学連携を推進していく場合、学校等の教育機関と博物館側の双方が連絡しやすい環境を整えておくことが重要と思われる。

音声ガイドは、当館で利用しているクラウド型データベース付属の音声ガイドアプリ「ポケット学芸員」を用いることとした（【図1】）。このアプリは通常のスマホアプリと同じく、来館者自身が手持ちのスマートフォンにアプリをダウンロードすれば無料で利用することができ、当館においても令和3年度夏季の特別企画展「唱歌！西洋音楽がやって来た—明治の音楽と社会—」において利用実績のあったツールである^(註4)。

音声ガイドの作成は、協力校が赤穂高校であることを考慮して開催地の赤穂にゆかりのある資料に限定することとした（【表1】）。また、作成にあたっては、文内容やその長さの設定が難しく、試行錯誤が続いた。館内で相談の結果、①文内容は詳細な説明を避けて簡単なものとする、②文章量は概ね30秒程度とすること、③同音異義語やそれに類するような語句についてはなるべく聞き違いのないような別の語句に言い換えることにまとまった。その際、音声ガイドはライトユーザー向けのツールとし、一方で補助解説はコアユーザー向けの内容（詳細あるいは補足的内容）とするという整理がつき、思わぬ副産物を得ることができた。

赤穂高校との収録状況についてふれておく。当初、ガイド音声は経験豊富な放送部に依頼することを考え、同校のマルチメディア部（放送部に相当）に依頼することを計画していた。しかし、学



【図1】音声ガイドアプリ「ポケット学芸員」

校側へ打診したところ、同部が部員不足によって活動休止状態にあることが分かった。幸い、赤穂高校側の計らいによって、同校の生徒会有志に協力いただけることとなった。高校側でも新型コロナウイルス感染症によって生徒会活動の範囲が縮小されていたため、生徒会活動として音声ガイド作成に参加することは生徒会にとってもプラスになるという判断によるものであるが、当事者レベルで学校側とつながりが密接であれば、早い段階でこうした情報もつかむことができ、対応も円滑にできたはずである。

(2) 成果と課題

音声ガイド導入成果としては、まず生徒が地元の資料解説を音読することによって地元の歴史を知るという点で当初の目的を達成できた点が挙げられる。

また、収録に参加した生徒のほぼ全員が朗読の初心者ではあったものの、聞き取り難い音声はほとんどなく、かえって「ハンドメイド感」のある味わいが良かったという感想も館内で聞かれた。放送部でない高校生に朗読を依頼できた点は、協力先の門戸を広げる上で思わぬ収穫を得ることが

できたと感じている。

赤穂高校から協力を得て作成した音声ガイドは、「こどもが楽しそうに聞いていた」といったように、利用者の側からも肯定的な意見がアンケート上にみられた。

その一方で、音声ガイドをそもそも「利用しなかった」、あるいは「ブラウザ上で聞けるようにしてほしい」といった意見も多く、スマホアプリをダウンロードして利用することは、利用者にとって敷居の高いものとして受け止められたとみられ、そういう意味でいえば玄人向けのツールとして活用すべきだったかもしれない。

音声ガイド等のツールについては、展示室入口にパネルを設置して周知を行ったが（【図2】）、来館者がどれほど「ポケット学芸員」をダウンロードしたのか疑問である。赤穂展見学者のうちどれほどの方々がアプリをダウンロードしたのか、残念ながらデータがないため分からない。しかし、ライトユーザー層からすれば、来館時に突然案内されたアプリをダウンロードすることに対して抵抗感が少なからずあったものと思われる。音声ガイドアプリを導入する場合は、この点を考慮に入れてツールを選択する必要があるだろう。



【図2】展示室入口に設置した案内パネル

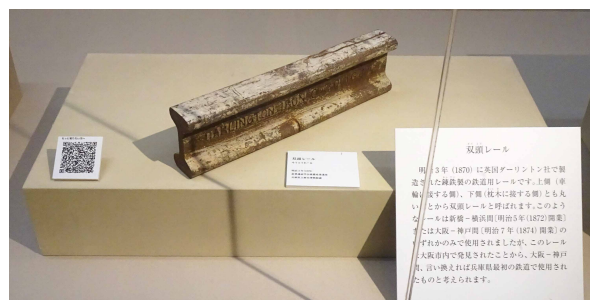
利用者目線では課題も多いものの、高校生の博物館活動への参画という観点では手応えを感じている。「ひょうごの未来へのかけはしとなる博物館」を使命とする当館にとって、ガイド音声の収

録に地元の高校生をはじめとした教育機関と連携することは、児童・生徒が郷土史を学習する機会を提供することができる点で大きな可能性を秘めている。活動を通じて、児童・生徒やその保護者層等が、博物館に対して関心をもちうることも期待できる。博物館のなかには集客を目的とした有名俳優や声優を起用する音声ガイドもしばしば見受けられるが、郷土学習という目的を主眼に置いた音声ガイドの利用も良いのかもしれない。その場合、学校側との信頼関係の構築が課題である点は前節で指摘した通りである。

2 補助解説

(1) 概要

次にQRコードによる補助解説の設置についてみていく。先述の通り、補助解説は展示準備の過程でコアユーザー向けの内容とすることとして、音声ガイドとの役割を分けた。補助解説の作成は観覧者が見学しながら利用しやすいように、展示資料の周囲にQRコードを添付したパネルを設置した（【図3】）。また、QRコードの遷移先は当館ホームページ上に開設した特設サイト上とし、そこに解説資料各種を置くこととした（詳細は「赤穂会場特設サイト」を参照：<https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/exhibition/12113/>）。解説資料は①解説シート（PDF）、②グーグルマイマップを用いた古写真の解説、③当館で過去に作成したコンテンツの3種類を作成した。



【図3】QRコードによる補助解説の設置例

①は赤穂展に合わせて当館で作成した資料解説シートである。ファイルはPDF形式とし、データ量が大きいものについては、通常版のほかに解像度を下げたモバイル版を作成して、QRコードから遷移する先は後者に設定した。解説シートの内容や形式は特に定めなかったが、見やすさの観点から、大まかなレイアウトを定めておくべきであっ

た（後述）。

②、③についてはオンライン上という特性を生かした補助解説である。②は古写真の補助解説としてグーグルマイマップを用いて古写真がどの場所を写したものを大まかに示すことによって、被写体の地域に詳しくなくとも親しみを感ずてもらいやすいように意図して作成したものである。また、③では当館のホームページサイトにて従前より公開していた資料解説にリンクすることで作業量の省力化を計った。

(2) 成果と課題

展覧会開催期間の前後の9月1日～10月31日までの特設ページ累計ページビュー数は524、ページ離脱率が52.67%、平均ページ滞在時間は2分26秒であった。赤穂展の開催期間中の来館者数が2,225人であったことから、単純計算で来館者の約24%が利用、ページ訪問者の半数が特設ページを熟覧していたと考えられ、ページの閲覧状況としてはまずまずの成果を得たといえる。

QRコードによる補助解説の成果として、オンライン上にコンテンツを設置したことで、解説媒体の選択肢が複数できた点が挙げられる。今回は通常の解説シートのほかに、②のようなマップを用い、古写真についてその位置やストリートビューの閲覧によって今昔の様子を対照できるメリットがあったと思われる。



【図4】作成した解説シートの例

一方、オンライン上のコンテンツではスマホ非

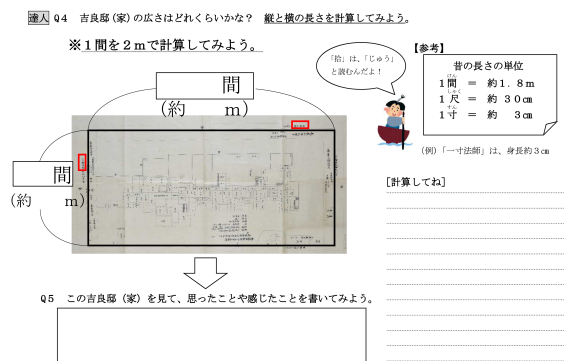
利用者等にとって利用のしづらいものとなった点も否めない。QRコードを利用した補助解説は今回のようにあくまで補助的に用いるのが適切であろう。

PDFで作成した補助解説シートの形式については課題が残る。今回特に解説シートの形式を定めず、A4サイズでPDFを作成したが、利用者の多くはスマホを用いていたため、解説シートをスマホ画面で閲覧する際、画面から見切れてしまうものもあった（【図4】）。偶然A4サイズ横書き2段組みとした解説シートに閲覧しやすい部分もあったことから、あらかじめスマホ画面で閲覧しやすいサイズを想定してPDFシートのレイアウトを定めておく必要があった。

3 ワークシートの作成

(1) ワークシートについて

赤穂展では、来館者用にワークシートを作成した（【図5】）。昨年度より、当館は兵庫教育大学と連携協力に関する協定を締結しており、学校教育研究科教授の山内敏男氏と定期的に連携協議を行っている。今回のワークシートは、その中でいただいた助言をもとに作成した。



【図5】ワークシートの一例（計算問題）

そのワークシートの概要については、次の通りである。

- ・赤穂（地元）ゆかりの資料に関するワークシート
- ・学校団体向け、引率教員（あるいは親子）との利用を意識、小学校高学年～中学生を対象
- ・（グループや友達と）対話をしながら問題を解いていくイメージ
- ・一問一答にならず、多様な解答が出るような出題形式を工夫

- ・QRコードから児童生徒向けの展示解説を見ることができる（タブレットも活用可）
 - ・音声ガイドアプリ「ポケット学芸員」も活用
- ※ 録音は赤穂高校と連携

なかでも、特にこだわったのは、ワークシートの設問についてである。一問一答の出題形式では、来館した児童生徒が、どうしてもワークシートの「答え探し」（答えを探すことが目的）になってしまう傾向がある。そこで、展示を見ることが新しい気付きを得て深く考えたり、歴史について関心が高まったりするような設問を工夫した。また、ワークシートを片手に展示を見ながらペアやグループで対話が生まれ、その対話を通して多様な答えが出るような設問をできるだけ多く出題した。

具体的に工夫した点については、次の通りである。

- ・取り掛かり易い問題の並び（苦手な人にも取り組みやすいように、平易な問題から配列）
- ・難易度が高い問題については達人問題に設定
- ・思考力を育てる順序配列問題（赤穂事件のなりゆきについて図を並び替える）
- ・計算問題として、吉良邸の面積を求める算数の要素を入れる（現在と異なる昔の長さの単位についても触れる）
- ・多様な答えが出る吹き出し問題（切腹をする大石内蔵助の心情を想像して書く）
- ・地図から読み取る問題（今の赤穂の風景と昔の地図、今の瀬戸内海と昔の瀬戸内海の比較など）

(2) アンケート結果から

ワークシートについて88名からアンケートの回答をいただいた。そのうち、「大変良かった」26.1%、「良かった」46.6%、「普通」25%、「やや不満」1.1%、「不満」1.1%という回答だった。「大変良かった」と「良かった」の割合の合計が72.7%となり、ワークシートの作成に取り組んできた価値が大いにあったように感じた。

次に、自由記述の意見については、「内容が工夫されていて大変良かった」「すごく良かった」「子どもたちが興味をもって取り組めると思う」「とても勉強になった」等の肯定的な意見があった。しかし、その一方で、「カラーにしてほしい」「難しかった（問題をわかりやすくしてほしい）」「漢

字にルビを付けて欲しい」等の要望や意見もあった。

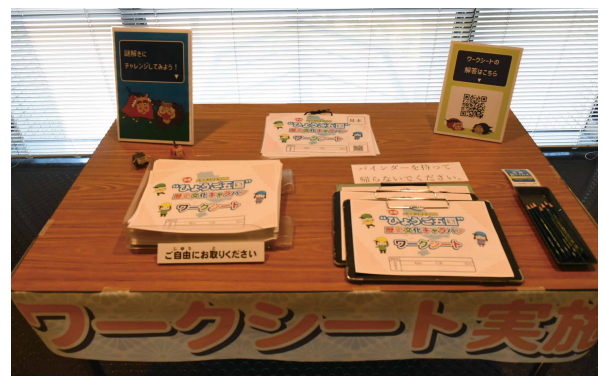
(3) 成果と課題

赤穂展を通して得た成果として以下の二点が挙げられる。一点目は、今回ワークシートを実施して、作成する際のポイントを知ることができたので、今後博物館での見学を楽しんでもらえるようなワークシートを館内で作成できるという自信を得られたことである。そして、二点目は、「主体的・対話的で深い学び」が求められている今の学びを加味して、ワークシートでも、展示を見ながら深く考えるきっかけになったり、対話を生み出したりできるような仕掛けは必須であると改めて感じられたことだ。当館は、来年度リニューアルオープンに際し、ワークシートも一新する予定である。これまでの当館のワークシートは、前節で述べたような一問一答に近い形式だったので、今回の取り組みで培った経験を、今後のワークシート作りに活用していきたいと思う。

次に、課題についてである。今回、赤穂キャラバン開催当初は、モノクロ印刷したワークシートを会場に設置していたところ（【図6】）、上記のアンケートの自由記述にもあったように、「カラー（印刷）にして欲しい」という要望が数件あったため、これを受けて、急きょカラー印刷版を会場に再設置した（【図7】）。次回からは来館者の目を引いたり、ワークシートに取り組んでみたいという意欲を少しでも刺激したりするためにも、カラー印刷したワークシートを用意すべきだと感じた。

また、アンケートの意見にもあったように、小さい子どもの来館者のためにも、すべての漢字にルビを付けることも心がけたい。

そのほか、「ワークシートの設問がどの展示資



【図6】ワークシート設置状況



【図7】カラー印刷のワークシート（表紙）

料と対応しているかわかりにくい」と職員からの指摘もあった。今回は館外の会場での開催となり、会場の規模やスペースの都合等もあったので、今後、当館でのワークシートを実施する際には、展示資料の順と問題の順を合わせるなど配置に気を配ったり、ワークシートに対応する展示資料名や番号を入れるなどの工夫をしたりすることで、ワークシートと展示資料との対応に努めたい。

（4）今後のワークシートについて

赤穂展の閉幕後にも、山内氏を交えて、今回のワークシートの実施等を振り返る協議を行ったが、その中で、ワークシートの種類（誰を対象とするか）や、ワークシートの難易度が話題に上がった。ワークシートの種類に関しては、学校団体向けには「学習用ワークシート」を用意し、個人向けには「エンタメ系ワークシート」を準備すべきという意見が出た。今回のワークシートを作成した趣旨は、来館者にとって展示内容についての把握に重きを置いたもので、学習効果を前提とした、前者の「学習用ワークシート」に分類される。「学習用ワークシート」については、本来であれば、観覧後の対応として、児童・生徒の理解をより深めるために、（引率教員や会場スタッフによるレクチャーという双方向の交流などの）学習支援が必要であるという意見もある。今後は、当館での実施ではこれらの学習支援についても館内で相談し、体制を整えることができればと思う。また、「エンタメ系ワークシート」については、「学習用ワー

クシート」と趣旨が異なってくるので、まずは「学習用ワークシート」を作成した後で、順次作成に取りかかることとしたい。

その他に、ワークシートの機能として、（設問を解くという以外に）展示資料が小さくて読み取れない場合や、冊子や卷子など展示部分以外の資料箇所が見ることができない場合に、ワークシートでの掲載・表示を通して情報を提供し、便宜を図ることができるという使い方についても貴重な意見をもらった。展示と連携することで、来館者の理解を助けることができるというワークシートの補足的機能にも気付かされたので、このような視点も今後の作成に活かしたいとも思った。

次に、難易度については、簡単過ぎたり、難し過ぎたりする内容は意欲をそぐことになるという意見や、設問については、緩急自在で飽きさせない工夫が必要であり、興味・関心度を備えた設問に配慮すべきという意見が出た。これらをふまえて今後は、難易度の設定や設問の内容についても、再度熟考し、より良いワークシートを作っていきたいと感じた。

今後、当館でのワークシートの具体的な実施方法としては、幅広い来館者に対応できるように、様々なジャンルや難易度のワークシート（問題）と解説補助シートを複数種類用意しておき、学校団体、個人関係なく、それぞれの意思で必要に応じた組み合わせで使用してもらうという案もある。

これから当館に来館する方々にとって有意義なワークシートが実施できるよう、今回の経験をもとに、今後ワークシート作成に取り組んでいきたい。

4 共有ノートの実施

（1）共有ノートについて

今回の赤穂キャラバンでは、ワークシートの他に「共有ノート」を作成した。設問に対する解答を来館者に書き込んでもらい、来館者同士で共有してもらうという取り組みである。その概要については、以下の通りである。

- ・「大石内蔵助切腹之図」の図中の人物に吹き出しを付け、心の声をノートに書き込む（【図8】）
- ・吹き出しは、「大石」・「（切腹を待つ）浪

- ・「（切腹を見守る）幕府の役人」の3枚
- ・あらかじめノートに吹き出しのページを印刷しておき、それぞれページに書き込んでもらう
- ・今回は館外の施設での開催のため、「共有ノート」という形式で実施することで、解答を集約する手間を省く

(2) 共有ノートの結果について

書き込まれた解答は次のような内容であった。

①大石内蔵助 6件

（例）赤穂藩の家を守ろうとして最後まで藩のためにやりきった。

②切腹を待つ浪士 10件

（例）今から殿のもとに。

③幕府の役人 9件

（例）最後まで主君につくした忠義のものだ。

個人的には、①の「大石」の吹き出しに対する書き込みが一番多いと予想していたが、②③に関する書き込みの方が多く、意外な結果に感じられた。また、予想していたよりも書き込みが少ないという印象だった。書き込みが少なかった要因として、開催期間が短期間であることと、閉じているノートを開いて書き込むという方法は“見える化”が難しかった、ということが考えられるが、切腹という限られた状況では多様な解答が出にくいので設問自体に要因があったのではという意見も出た。

実際に、当館での過去の特別企画展で、来館者が感想を書き込むという「感想ノート」を実施したことがあるが、開催期間中の書き込みがB5ノート数冊にも至ったということだった。このことから、今後はノートへの書き込みや、ホワイトボードに付箋を貼ってもらうなどの方法論だけでなく、参加者を増やすことができるような設問の立て方についてさらに検討を重ねる必要があると感じた。

(3) 今後の来館者による解答の共有方法について

①解答へのレスポンス

今回の赤穂キャラバン閉幕後の振り返りの会議では、書いてもらった来館者の解答に対して、博物館側がどうレスポンスするのがよいのかということが議題に上がった。山内氏によると、レスポ

Q. 切腹しようとする大石内蔵助は、心の中でどんなことを思い願っているのだろう？
また、他の人はどんなことを思っているのかな。想像して書いてみよう。



【図8】 共有ノート



【図9】 共有ノート付近に設置したボード

ンスについては、HPに模範解答と解説を載せたり、ホワイトボード等に付箋で貼る形式では博物館側がコメントを貼ったりしてレスポンスするのが良い、ということだった（「感想ノート」については、返すべき解答がないので、レスポンスは不要ということだった）。また、対話を生み出す設問を、会場に設置するだけでなく、SNS上で配信すれば、反響も大きくなるのではという意見も出たが、一つ一つにレスポンスを返すことが大変手間と時間がかかることになるので、それについては、今後、要検討である。

②今後の取り組み

来館者による解答の書き込みを増やしたり、参加をより促したりできる設問についても、山内氏から提案をいただいた。多様な解答が出たり、（他の人やHPの）解答と自分の解答を比べたくなったりする取組として、主題作り（キャッチフレーズ作り）という設問例が挙げられた。今、高校の授

業では、探求学習として、ある場面について、主題（標題）を付けるという学習活動がある。主題を作るためにはその主題を付けた根拠や理由について深く考える必要があるとともに、多様な答えを導き出せるという利点もあるので、このような取組を取り入れるのも面白いということだった。

今後の取組としては、来館者が解答を共有する場合には、来館者同士の解答や意見が一目で見えるだけでなく、それについての模範解答も表示する必要がある。“見える化”“見せる化”を意識した掲示方法を考え、それと同時に、来館者が「書きたい」「書いてみたい」「是非参加したい」と思えるような設問も工夫したいと思う。

また、共有する方法として、解答を通して、来館者が館スタッフやボランティアを巻き込み、人的なコミュニケーションの輪を広げることができるような新しい取組も考えていきたい。

まとめ

本稿では展示資料の情報の提供のあり方について、赤穂展での取り組み事例の紹介と考察を加えてきた。

まずはライトユーザー向けに無料の音声ガイドアプリを赤穂高校生徒会の協力を得て導入した。この点については高校生と博物館との接点とする点、そして高校生に対する郷土理解を深める場を提供するという目的は達成できたものと考えている。一方、来館者へのサービスとしてはアプリのダウンロードに対する抵抗感から利用を敬遠される傾向にあり、ニーズが合わなかったことが課題として残された。本アプリは無償提供できる点において手軽に利用でき、設置側からしてもメリットは大きい。博学連携を主軸に置きながら、小規模展示あるいは常設展示に利用していく方向での活用が良いように思われる。

補助解説の配布についても、当館ホームページ上に資料をアップロードする方式は、経費削減や解説の手法が多様になる点で有効な策であった。従前通り紙ベースで配布する方式を含め、選択肢の1つに加えておきたい。

ワークシートについては、学校教育という観点から作成した点で大変有益な試行であったと考えている。もちろんワークシートの作成は学芸員だけでも可能ではある。しかし、学芸員だけでは、

学校現場でのニーズや、そこで行われる教育内容をふまえながら作成にあたることは難しい。その意味で、教育現場経験者がその作成に携わったことは意義のあるものであった。また、教育学の視点から幾度も助言をいただいた山内敏男氏の存在も大きい。

残された課題も多いが、こうした経験は「ひょうごの未来へのかけはしとなる博物館」を使命とする当館にとって、手応えのある取り組みとなったと考えている。

【注】

- 1 香川雅信『“ひょうご五国” 歴史文化キャラバン』について」（兵庫県立歴史博物館研究紀要『塵界』34（兵庫県立歴史博物館、2023）。展示概要やアンケート結果は、『兵庫県立歴史博物館 館報』33 令和3年度（2021）（兵庫県立歴史博物館、2022）、p22-28および『同』34 令和4年度（2022）（兵庫県立歴史博物館、2023刊行予定）を参照いただきたい。
- 2 音声ガイドは他館でも広く導入されている。館内で機器を貸し出すタイプと、手持ちのスマホをもちいるタイプに大別され、後者もアプリをダウンロードするタイプと、ブラウザ型の二者に細分化することができるが、当館ではアプリ型を用いた。また、QRコードを展示解説に利用する事例も九州国立博物館や沖縄県立博物館・美術館等で導入がみられる。
- 3 『MAPPS press』11（早稲田システム開発株式会社、2018）
- 4 山田加奈子「【展覧会記録】特別企画展「唱歌！西洋唱歌がやってきた一明治の音楽と社会」」（兵庫県立歴史博物館研究紀要『塵界』33、2022年）。

【謝辞】

一連の取り組みを遂行するにあたり、県立赤穂高校の生徒会、担当いただいた頓田郷平教諭をはじめ大角謙二校長以下学校関係者各位には大変お世話になった。また、兵庫教育大学教授の山内敏男氏にはワークシートの作成をはじめとして多くのご助言を賜った。記して謝意を申し上げる。

【表1】“ひょうご五国歴史文化キャラバン”播磨（赤穂）会場出品一覧

No.	資料名	音声ガイド	補助解説	備考
五国の成立				
1	木簡レプリカ		○	
2	播磨国風土記(複製)		○	
五国のやきもの				
8	三田焼 青磁舟形筆洗(目録No.32)		○	
9	東山焼 染付龍文花生(目録No.46)		○	
10	丹波焼 壺(目録No.2)			
11	砥平焼 赤絵海老文茶碗(目録No.58)		○	
12	出石焼 染付牡丹唐獅子文徳利(目録No.56)		○	
五国の民俗				
13	三ツ山祭礼図屏風(複製)		○	
14	波々伯部神社お山模型			
15	デコノボウ(複製)			
16	淡路人形		○	県指定文化財(九尾の狐)
17	毛獅子			
18	麒麟獅子			
ひょうごの近代				
21	伝伊藤博文大礼服			
22	神戸人形			
23	双頭レール		○	産業遺産学会推薦産業遺産認定
24	マッチ棒の姫路城			
25	宝塚少女歌劇双六			
26	神戸みなとの祭ポスター			
27	降伏文書調印に使用した万年筆			
赤穂ゆかりの資料				
28	太閤樹(複製)	1		原品は国指定重要文化財
29	池田輝政像(複製)	2		原品は林原美術館蔵
30	浅野長政像	3		
31	浅野家時代赤穂城之図	4		
32	浅野家時代赤穂藩之図	5		
33	軍法之巻一 城之図	6	○	鳥羽正雄コレクション
34	「山鹿基五左衛門砂形之写」縄張図	7		鳥羽正雄コレクション
36	元禄十四年赤穂城請取脇坂淡路守行列帳	8		
36	吉良上野介郎平面図写	9		
37	大石内蔵助切腹之図	10		
38	赤穂義士絵巻	11	○	
39	高橋秀吉コレクション(古写真・絵はがき)	12		
	明治時代の赤穂城三之丸大手門	13	○	古写真
	赤穂城大手門より北望	14		古写真
	旧制県立赤穂中学校絵葉書(農園作業)	15		絵はがき
	旧制県立赤穂中学校絵葉書(教練)			絵はがき
	学校給食(赤穂尋常高等小学校)	16		絵はがき
	赤穂御崎から西望	17		古写真
	坂越駅内より東望	18		古写真
	播州坂越港内船舶投錨之景	19		絵はがき
	有年考古館(旧館内部南望)	20		古写真
	有年考古館(東面)	21		古写真
	相生造船所 祐邦丸進水中	22		古写真
40	播磨国赤穂郡相生村浜本家文書	23		
	干鰯当座帳			
	鯉鑑札	23~24	○	
	造船関係資料			
41	製塩図解	25	○	
42	播州井龍野領聞書写本	26~27		
43	西海航路図巻	28	○	

執筆者紹介（掲載順）

山口 奈々絵（当館学芸員）

吉原 大志（当館学芸員・主任）

竹内 信（当館学芸員）

鈴木 敬二（当館学芸員・館長補佐兼事業企画課長）

前田 和彦（当館指導主事）

香川 雅信（当館学芸員・学芸課長兼県立美術館課長）

神戸 佳文（当館学芸員・社会教育推進専門員）

兵庫県立歴史博物館紀要
塵界 第三四号

編集 兵庫県立歴史博物館
印刷 合名会社 柳生印刷所
発行 令和五年三月二十七日

Printed in Japan©2023

04 教①1-017 A4

〈訂正〉

『塵界』第33号

75（38）頁

（誤）No.1039 金の船 第4巻第6号（6月号）

（正）No.1039 金の星 第4巻第6号（6月号）

91（22）頁 『金の船』解説 7～8行目

（誤）新たに金の船社を主宰するにあたって『金の星』と誌名を変更、

（正）新たに金の船社を主宰し、『金の星』と題する別雑誌を発刊する（巻号は『金の船』を踏襲）。

※キンノツノ社からはその後も『金の船』の発行は継続されており（のちに発行者は越山堂を経て、資文堂書店へと変わる）、二誌が併存する期間が続いていた。